研究会報告　1

『エリュトゥラー海案内記』の遺跡を訪ねて
(1)　エジプト〜エチオピア

蔀　勇造

1.　はじめに

『エリュトゥラー海案内記』は，1世紀の半ば過ぎにエジプト在住のギリシャ系商人によって著された商業案内書である。現在の紅海からアラビア海，インド洋へかけての海域の，沿岸諸地方の物産や各港における交易の実情を詳しく紹介していることから，東西交渉史の研究においては言うに及ばず，史料的に恵まれていない当時のそれらの地方の事情を知るうえでも，不可欠の史料として重んじられてきた。我が国では，昭和21年刊の故村川堅太郎氏の訳註書[1]が長らく使用されてきたが，筆者は，その後半世紀近くの間に諸分野で達成された研究の成果を取り入れ，この村川氏の翻訳と註釈を一新しようと考えた。そしてこの企画に対し，財団法人三菱財団の平成5年度人文科学研究助成を受けられるようになったのを幸い，『案内記』の記述の対象になっている紅海・インド洋沿岸の諸地方の実地調査を，今年（平成6年）から来年にかけて3回に分けて行うことにした。

第1回目の今回は，ヨルダンと，紅海の西のエジプトからエチオピアにかけての地の，『案内記』関係の遺跡の探訪を主目的とした。科学的な考古学調査を行った訳ではないので，学問的に新たな発見として報告できることは少ない。それでここでは，各遺跡について近年の調査・研究の状況に触れるとともに，現地を訪れて気付いた点を記すにとどめたい。旅程の都合で，エチオピアとエリトリアを訪れた後でエジプトに回ったが，以下には『案内記』の順序に従ってエジプトについて先に記す。なお最後に訪れたヨルダンのペトラに関しては，我が国においても既によく知られていると思い，本報告では割愛した。

2.　エジプト

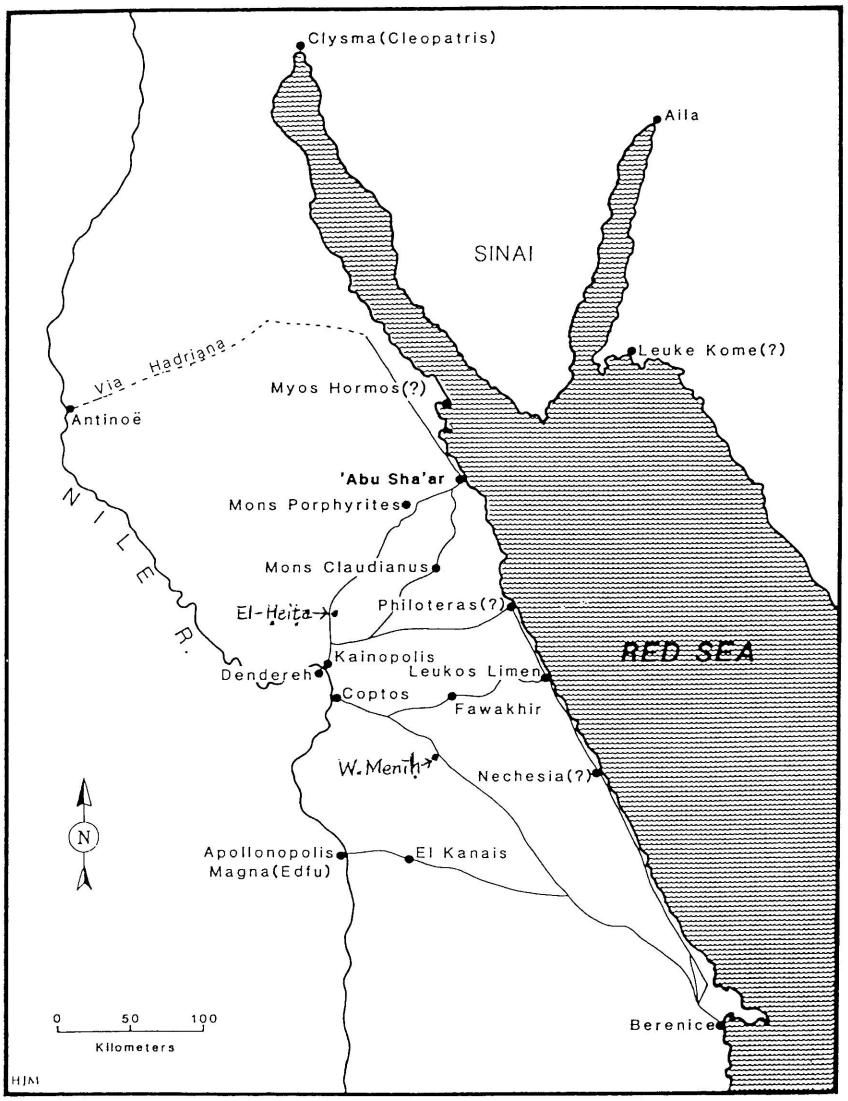
まず『案内記』第1節は，紅海に臨んだエジプトの交易港について次のように記す。

> エリュトゥラー海の指定された停泊地や同海沿岸の商業地の中で，最初のはエジプトの港ミュオス・ホルモスである。その次には，航海していくと1800スタディオンを隔てて右手にベルニーケー（正しくはベレニーケー）がある。両地の港はエジプトの果てにあり，エリュトゥラー海の湾である。

ナイル河と紅海の沿岸は勿論のこと，両者の間に横たわる砂漠も早くから調査・研究の対象となってきた。砂漠には隊商路・宿駅の遺跡の外に，採石場や鉱山の跡も少なくない（地図1参照）。隊商路・宿駅の調査については，近年アメリカのデラウェア大学の活動に見るべきものがあるので，筆者も今回は主にこの調査隊の報告[2]を参考に踏査を行った。先ず3月18日と20日の両日，ローマ時代にナイル河畔の交易センターであった Coptos（現 Qift）の遺跡を観た。21日にはキフトの北の Qena から紅海岸の Abû Sha'r に通じる未舗装ルートを車で走り，El-Ḥeiṭa（写真1）を始めとする沿道の宿駅と，Mons Porphyrites の採石場の遺跡を訪れた。翌日にはアブー・シャァルの海岸の遺跡（写真2）と，近くの Bir Abû Sha'r El-Qibli を観た後，クセイル経由でキフトに戻らねばならなかったので，非常に慌ただしい日程であった。このアブー・シャァルは従来ミュオス・ホルモスに比定されてきたが，デラウェア大学隊の調査によると遺跡はローマ時代後期に属する砦の跡で，隊商路と言われてきたものも，採石場の石をナイル河畔まで運ぶための道ではなかったかという。アブー・シャァル北方の Zeit 湾に臨んで，やはりローマ時代のものと思われる別の遺跡があるということなので，この地域一帯のさらなる調査が

望まれる。

他方ベレニーケーは遺跡の場所こそ判っているものの，そこが現在軍港の一部になっているため訪れることができず，24日にコプトスとこの港を結ぶルートの途中にある，Wâdî Menîḥ の岩室（写真3）を調査するだけで満足せざるをえなかった。ここの岩壁には，古来この道を往来した旅人達が様々な言語と文字で記した多くのグラフィットが遺されている。既に複数の欧米の研究者によって調査が行われ，数点の論文も発表されているが，有名な Lysas のギリシャ語刻文（写真4）の左下に，エチオピア語刻文を新発見したのは収穫であった。エジプトではこの外，19日に Mons Claudianus の採石場跡を訪れた。なおエジプト調査にあたって，財団法人中近東文化センターの川床睦夫氏より数々の便宜を図っていただき，感謝に堪えない。



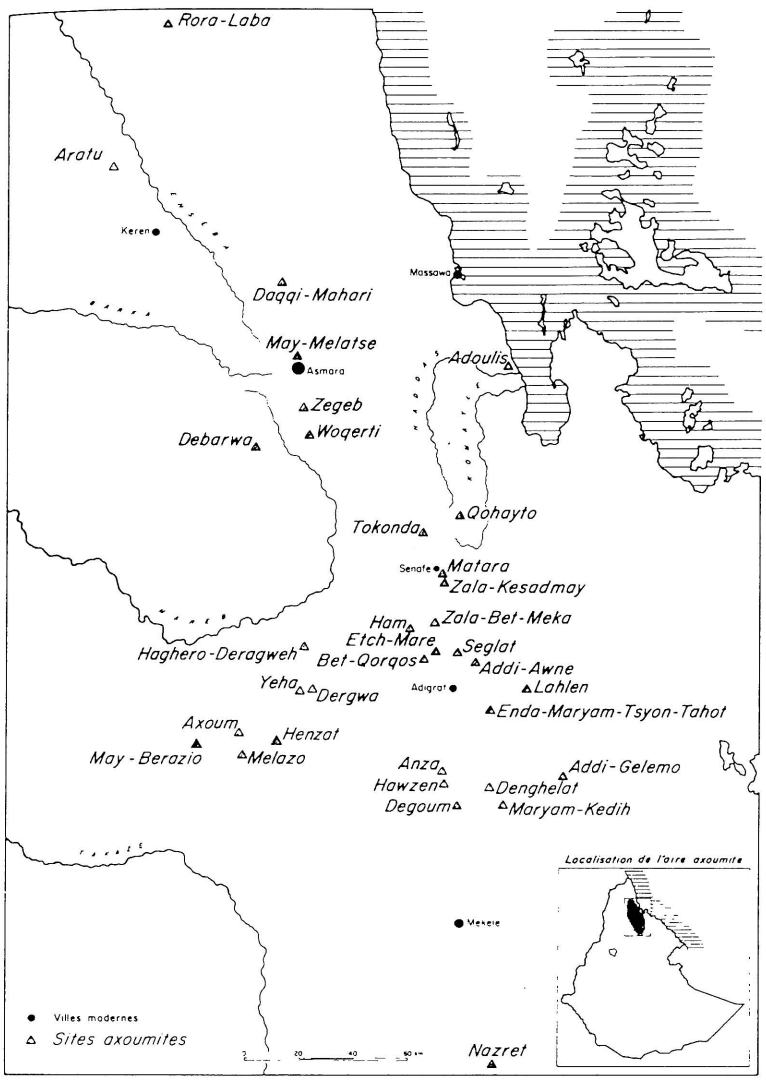
地図1　ナイル河畔と紅海を結ぶルート
(S. E. Sidebotham *et al.*, "Fieldwork…", Fig. 1 に加筆)

3.　エチオピア・エリトリア（地図2参照）

『案内記』第4節には，現在のエリトリア海岸より数キロ入った所にアドゥーリ（＝アドゥーリス）という商業地のあることを伝え，そこから内陸に3日進むと象牙取引地のコロエーが，さらに5日進むと首都のアクソミテース（＝アクスム）があると記している。

アクスムはエチオピア北部のティグレ州に現在もこの名の町があり，ここがかつてアクスム王国の首都であった頃を偲ばせる遺跡や碑文が遺されている（写真5，6）。3月5日から9日にかけて滞在し，6・7の両日はアクスム市内の遺跡や博物館を調査，また8日には近郊のイェハにあるプレ・アクスム期の遺跡とデブラ・ダモの修道院を訪れた。アクスムの調査・研究史と遺跡の現状については，金沢大学文学部の柘植洋一氏が既に報告[3]を書かれているので，そちらを参照されたい。

エリトリアでは首都アスマラの考古博物館（写真7）に，アドゥーリス遺跡より出土した遺物が展示されている。12日と15日の2度にわたって調査し，館長の Tajedin Nouredaim 氏とも会見した。13日にアスマラから紅海岸のマッサワに行き，戦火の跡も生々しい市内の様子を見て回った後，翌日悪路に難渋しながらもなんとかアドゥーリスにたどり着き，短時間ではあったが遺跡と周辺の景観を観察できたのは幸いであった（写真8）。この遺跡はこれまで欧米の数人の研究者に



地図2　アクスム時代の遺跡
(F. Anfray, *Les anciens Ethiopiens,* Paris, 1990, p. 115)

よって部分的な発掘が行われはしたが，海岸部も含めて周辺部のサーヴェイからやり直す必要があると感じている[4)]。

注

1) 『エリュトゥラー海案内記』，生活社，昭和21年（1993年に中公文庫として復刊）。なおこの書の最も新しい訳註書は，L. Casson, *The Periplus Maris Erythraei,* Princeton, 1989 で，『オリエント』33-2, 1990, 139-145頁に拙評がある。

2) R. E. Zitterkopf and S. E. Sidebotham, "Stations and Towers on the Quseir-Nile Road", *Journal of Egyptian Archaeology,* 75, 1989, 155-189; S. E. Sidebotham *et al.*, "Fieldwork on the Red Sea Coast: The 1987 Season", *Journal of the American Research Center in Egypt,* 26, 1989, 127-166; id., "Survey of the 'Abu Sha'ar(*sic*)-Nile Road", *American Journal of Archaeology,* 95, 1991, 571-622: S. E. Sidebotham, "Ports of the Red Sea and the Arabia-India Trade", V. Begley and R. D. De Puma (eds.), *Rome and India: The Ancient Sea Trade,* Madison, 1991, 12-38.

3) 柘植洋一「アクスム（エチオピア北部）の遺跡について」，『金沢大学考古学紀要』，21, 1994, 159-168.

4) アドゥーリスについての詳細は，拙稿「アドゥーリス紀功碑文の新解釈」，『東西海上交流史研究』3, 1994, 73-114 を参照されたい。そこにも記したように，カッスンは『案内記』第4節の記事に照らして，当時のアドゥーリスは現在知られている遺跡よりも北の，マッサワ湾に臨む付近にあったのではないかと推測している。

写真 1　エル・ヘイタの宿駅遺跡

写真 2　アブー・シャァルの砦内部

写真 3　ワーディー・メニーフの岩室入口

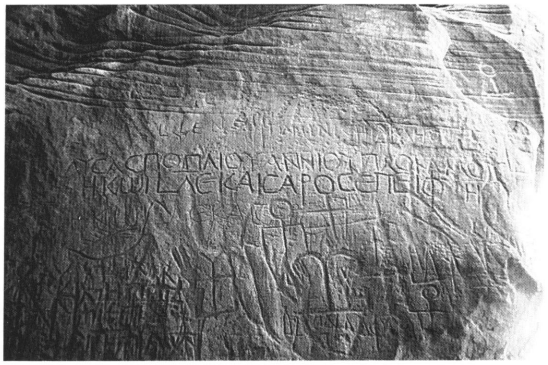


写真 4　リュサスのギリシャ語刻文

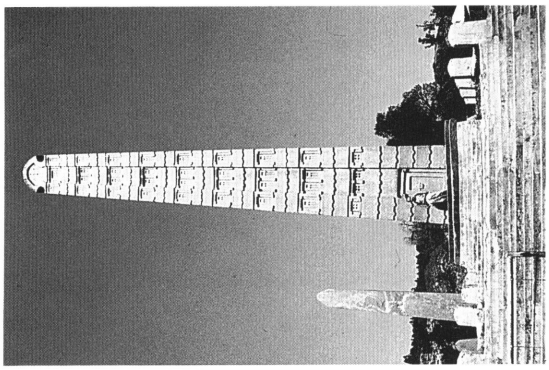


写真 5　アクスムのステレ

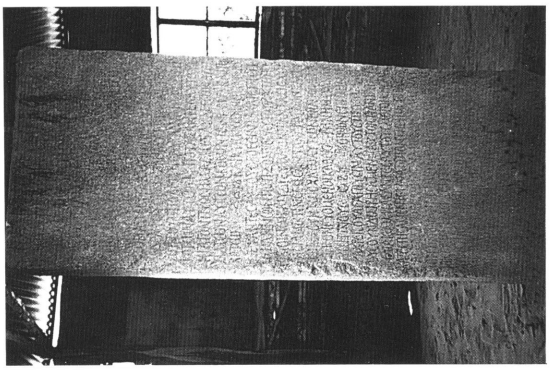


写真 6　エザナ王碑文（アクスム）

写真 7　アスマラの考古博物館

写真 8　アドゥーリスの遺構